和歌の調べ

――万葉集・古今和歌集・新古今和歌集――

目標

- 和歌の修辞と歴史的背景を意識しながら、そのリズムを味わう。
- 和歌に表れた古人の感じ方やものの見方を理解する。

和歌は、五音と七音を基調とした定型の詩です。昔から人々は、喜びや悲しみ、祈り や愛情など、さまざまな思いを和歌によって伝えてきました。時代とともに、歌のよみ ぶりにも変化がありました。

和歌独特のリズムを味わいながら、古人の思いにふれましょう。

万葉集

『万葉集』には、自然の風景にふれた際の感動を率直に表す歌が数多くあります。次の歌では、純白の衣に夏の到来を見いだした作者の驚きが、鮮やかに歌われています。

▼祈

（129ページ）
持統天皇　六四五―七〇二　天智天皇の皇女で、天武天皇の皇后。

春過ぎて　夏来たるらし　白たへの　衣干したり　天の香具山

持統天皇

田子の浦ゆ　うち出でて見れば　真白にそ　富士の高嶺に　雪は降りける

山部赤人

山部赤人の歌碑がある「ふじのくに田子の浦みなと公園」（静岡県富士市）

右の歌は、旅の途中で富士山を見た時によまれたものです。見晴らしのきく所に出てみると、神々しいまでの山の全貌が姿を現します。真っ白な雪を冠してそびえ立つ姿を仰ぎ見た感動が表現されています。

君待つと　吾が恋ひをれば　我が屋戸の　すだれ動かし　秋の風吹く

額田王

春の野に　かすみたなびき　うら悲し　この夕影に　うぐひす鳴くも

大伴家持

白たへ　楮の皮の繊維で作った白い布。「袖・衣」などにかかる枕詞でもあるが、ここでは「真っ白な」の意味。

天の香具山　奈良県橿原市にある山。畝傍山、耳成山とともに大和三山の一つ。

山部赤人　生没年未詳。奈良時代前期の歌人。柿本人麻呂と並んで『古今和歌集』仮名序にもその名があがる。

田子の浦ゆ　田子の浦を通って。当時の「田子の浦」は、現在の静岡県の蒲原、由比辺りの海岸をさす。『小倉百人一首』では、「田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」の形で採られている。

額田王　生没年未詳。天智・天武天皇時代に活躍した歌人。

屋戸　家もしくは家の戸。

大伴家持　七一八？―七八五　歌人。大伴旅人の子。『万葉集』の最終的な編纂に携わったと考えられている。

多摩川に さらす手作り さらさらに なにそこの児の ここだかなしき

（東歌）

父母が 頭かきなで 幸くあれて 言ひし言葉ぜ 忘れかねつる

（防人の歌）

『万葉集』には、短歌ばかりでなく、長歌もあります。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば ましてしぬはゆ いづくより
来たりしものぞ まなかひに もとなかかりて 安眠しなさぬ

山上憶良

反歌

銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも

万葉集　現存する日本最古の歌集。二〇巻。奈良時代に成立。歌数は約四千五百首。歌の形式は短歌・長歌・旋頭歌などがある。代表的歌人には、天智天皇・額田王・柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・大伴家持などがいる。

《出典》『新編日本古典文学全集6～9　萬葉集①～④』によった。

東歌　東国地方の人の歌。

ここだかなしき　こんなにもいとしいのか。

防人の歌　東国から三年任期で九州に送られ、要地を守った兵士とその家族の歌。

幸くあれて　無事でいるように。「幸くあれと」の東国方言。

言葉ぜ　「言葉ぞ」の東国方言。

山上憶良　六六〇―七三三？　歌人。遣唐使にも任命されたことがあり、大伴旅人と交流があった。人生や社会についてよんださまざまな歌を残した。

しぬはゆ　自然に思い出される。

まなかひに　目の前に。

もとな　しきりに。

反歌　長歌のあとに添え、長歌を要約したり補足したりする短歌。

しかめやも　反語表現。及ぶだろうか、いや及びはしない。

古今和歌集

『古今和歌集』の時代の人々は、時の移ろいや、人の心の変化を敏感に捉え、目の前には実際にない風景なども、想像力豊かに表現するようになりました。花といえば桜、秋といえば紅葉といった、今日まで続く伝統的な美意識や季節感も『古今和歌集』によって確立しました。

春立ちける日よめる

袖ひちて むすびし水の こほれるを 春立つけふの 風やとくらむ

紀貫之（きのつらゆき）

昨年の夏、袖をぬらすこともいとわずすくいあげた澄んだ清水は、冬を迎えて一面に凍ったことだろうが、それを立春を迎えた今日の風が、暖かに溶かしていることだろう。今目の前にあるわけではない清水のさまを想像する作者は、春の到来を喜びながら、一首のうちに、夏から、冬、そして春という季節の移ろいを巧（たく）みによみこみます。

五月待（さつき）つ 花たちばなの 香をかげば 昔の人の 袖の香ぞする

よみ人知らず

紀貫之 八七二？―九四五？ 歌人。『古今和歌集』の撰者（せんじゃ）の一人であり、仮名序の著者。『土佐（とさ）日記』を著した。

▼巧

よみ人知らず 作者不明の歌に記す言葉。

花たちばな 花の咲いているたちばな。たちばなはミカン科で匂いが強い。

袖の香 袖にたきしめた香（こう）の香り。

山里は 冬ぞさびしさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば

源宗于

思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを

小野小町

古今和歌集　最初の勅撰和歌集。二〇巻。平安時代前期に、醍醐天皇の命により、紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑の四人が撰進した。代表的歌人には、撰者四人のほか、在原業平・小野小町などがいる。

《出典》『新編日本古典文学全集11　古今和歌集』によった。

新古今和歌集

『新古今和歌集』の時代になると、『万葉集』や『古今和歌集』、『源氏物語』などの古典文学を踏まえた歌が数多く作られ、中には物語の登場人物になったつもりでよまれたものもあります。人々は現実に見たり、経験したりしていない世界を想像して、美しい情景を描き出します。

5

源宗于　？―九四〇　平安時代前期の歌人。

小野小町　生没年未詳。平安時代前期の歌人。多くの恋の歌を残す。

覚めざらましを　目を覚まさなかっただろうに。

源氏物語　平安時代に紫式部によって書かれた長編の物語。

春の夜の　夢の浮橋　とだえして　峰にわかるる　横雲の空

藤原定家

右の歌は『古今和歌集』の恋の歌「風吹けば峰にわかるる白雲の絶えてつれなき君が心か」（壬生忠岑）を踏まえ、夢から覚めた人物の目の前に広がる風景を、その人になったつもりで美しく描いています。「夢の浮橋」の語は、『源氏物語』の巻の名前でもあり、読む者を『源氏物語』の世界へいざないもします。

心なき　身にもあはれは　知られけり　鴫立つ沢の　秋の夕暮れ

西行法師

玉の緒よ　絶えなば絶えね　ながらへば　忍ぶることの　弱りもぞする

式子内親王

新古今和歌集　八番めの勅撰和歌集。二〇巻。鎌倉時代に、後鳥羽上皇の命により、藤原定家・藤原家隆らが撰進した。代表的歌人には、撰者のほか、式子内親王・藤原俊成・西行・慈円などがいる。

《出典》『新編日本古典文学全集43　新古今和歌集』によった。

藤原定家　一一六二―一二四一　歌人。『新古今和歌集』の撰者の一人。『小倉百人一首』の撰者とされる。

西行法師　一一一八―一一九〇　歌人・僧侶。鳥羽上皇の北面の武士として仕えたが、二十三歳の時に出家し、各地を遍歴した。家集に『山家集』がある。

▼沢

式子内親王　一一四九―一二〇一　歌人。後白河天皇の皇女。

玉の緒　命。

ながらへば　生き長らえると。

みちしるべ

内容を捉えよう

1 和歌のリズムを意識しながら、音読しよう。

2 和歌独特の修辞に注意しながら、その意味を理解しよう。

読み深めよう

3 和歌を一首選び、歴史的背景について考えよう。

自分の考えを伝え合おう

4 和歌を一首選び、自然や人間に対する作者の思いについて、文章にまとめよう。

振り返り

□ 歌集ごとの和歌のリズムや内容の違い、特徴を理解しているか。

□ 作者の心情を想像し、和歌の世界を味わっているか。

この教材で学ぶ漢字

128 祈（キ）　いのる　祈願　お祈り

131 巧（コウ）　たくみ　技巧　悪巧み

133 沢（タク）　さわ　光沢　沢の水

新出音訓

128 古今★（キン）

歴史的仮名遣（づか）い

①語中・語尾の「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」→「ワ」「イ」「ウ」「エ」「オ」と発音

例 あはれ→アワレ　うぐひす→ウグイス

とふ→トウ　いへ→イエ　いとほし→イトオシ

②次のような「む」「なむ」→「ン」「ナン」と発音

例 越えむ→コエン　竹なむ→タケナン

③次のような母音の連続は伸ばす音に

「ア段」＋「う・ふ」→「オ段」の長音（au→ô）

「イ段」＋「う・ふ」→「ユウ・〇ュウ」（iu→yû）

「エ段」＋「う・ふ」→「〇ョウ」（eu→yô）

例 らうたし→ロウタシ　うつくしうて→ウツクシュウテ　けふ→キョウ

④「ゐ」「ゑ」「を」→「イ」「エ」「オ」と発音

例 ゐなか→イナカ　こゑ→コエ　をかし→オカシ

⑤「ぢ」「づ」→「ジ」「ズ」と発音

例 もみぢ→モミジ　いづれ→イズレ

⑥「くわ」「ぐわ」→「カ」「ガ」と発音

例 くわかく→カカク（過客）　ぐわんじつ→ガンジツ（元日）

和歌の修辞

枕詞

特定の言葉を導くために、その直前におかれる言葉を枕詞といいます。多くは五音で、現代語には訳しません。

例 ひさかたの→光・日
　　しろたへの→袖・衣

序詞（じょことば）

特定の言葉を導く点では枕詞と同様ですが、序詞の場合、後に続く言葉は決まっていません。枕詞よりも多くの音数からなるのも特徴です。「多摩川に……」の歌では、「多摩川にさらす手作り」が序詞で、「さらさらに」という言葉を導いています。現代語に訳します。

掛詞（かけことば）

掛詞は、同音異義を利用して、一つの言葉に複数の意味をもたせる技法です。「山里は……」の歌では、「かれ」の部分に「人目が離（か）れる」と、「草が枯れる」の意味をもたせ、歌の文脈を二重にしています。

和歌の句切れとリズム

和歌は、五音と七音の句を基本にしてできています。一首の中の意味上の切れめを**句切れ**といいます。音読するときには、句切れのところで、少し間をおいて読みます。

句切れには、それがどこにあるかによって、**初句切れ・二句切れ・三句切れ・四句（しく）切れ**があります。

例えば、次の和歌は、それぞれ、次のように切れています。

①心なき身にもあはれは知られけり／鴫立つ沢の秋の夕暮れ

②春過ぎて夏来たるらし／白たへの衣干したり／天の香具山

これを音読すると、①は「五七五／七七」と三句で切れ、②は「五七／五七／七」と二句と四句で切れています。①は七五調、②は五七が続いて五七調のリズムになります。つまり、「初句切れ」「三句切れ」は七五調、「二句切れ」「四句切れ」は五七調のリズムになるのです。